

現実と幻想と空虚 —— ペレーヴィンをめぐる試論

岩本和久

1. 新しいロシア文学の旗手とその現在

ヴィクトル・ペレーヴィンがソヴィエト崩壊後のロシア文学を代表する存在であることに異を唱える者は多くないだろう。現在のロシア文学のメインストリームを切り開いたのは彼であるといっても過言ではない。

90年代ロシア文学を表現するために、しばしば「ポストモダニズム文学」という言葉が用いられる。しかし、この言葉はペレストロイカの時期にすでに存在していたものだ。「ポストモダニズム文学」を代表すると通常考えられる作家、ヴィクトル・エロフエーフやプリゴフ、ソローキンらは、ソヴィエト体制下のアンダーグラウンド芸術「コンセプチュアリズム」を出自としており、その意味でペレストロイカ期の芸術が見せたひとつの表情とみなしうるだろう。ペレストロイカの時期には、既成の制度が問い直された。歴史は見直され、文学も見直された。「ポストモダニズム」という潮流も、そのような実践の一形態と考えられる。

ペレーヴィンに対して注目が払われたのも、ソヴィエト末期のことである。しかし、ペレーヴィンには「ペレストロイカの文学」との断絶が確かに存在していたのではないだろうか？ その兆候としては、しばしばアメリカ的と考えられもする「ポップさ」や、アニメやCM、ドラマといった「テレビ文化」との親近性といったものを、とりあえず挙げるのできるのだろう。ソローキンのような作家が過去の芸術に死を宣告することで過去の芸術と向き合ったり、エヴゲニイ・ポポフのような作家がソヴィエトの歴史にこだわったりする状況を念頭に置かならば、ペレーヴィンの「ポップさ」はやはりどこか異質のものであると考えざるを得まい。日本において当初、ペレーヴィンがSF作家と考えられていたことも、そうした異質さと無縁ではないだろう。

そのようなペレーヴィンの作品は、その後のロシア文学の展開を考えるならば、文学史的な事件であったのかもしれない。ガロスとエヴドキモフによる小説『[ヘッド]クラッシャー』も、消費社会の極みとも言える日本で暮らす読者には陳腐な大衆小説としか受け止められないのかもしれないのだが、ロシアでは「国民的ベストセラー賞」を受賞し、「ポスト・ペレーヴィン」世代を代表する作品とみなされている。ストゴフやデネシキナ、ブクシャといった最近の若手作家を指して用いられるこの「ポスト・ペレーヴィン」といった表現自体、現代ロシア文学におけるペレーヴィンの位置、「ポップ」な文学の先駆者としての位置を示すものと言えるだろう。

2003年の9月、ペレーヴィンの『DPP(NN)』がエクスマ社より刊行された。1999年の『ジェネレーションP』以降、沈黙を守っていたベストセラー作家の待望の新作ということもあるのだろうが、文芸書と言えど2,000部や5,000部というあたりが相場であるロシアにおいて、150,100部も印刷されたというのには少し驚いてみてもいいのかもしれない。

とはいえ、この本の内容はあまり良い評判を生みそうなものではない。いや、むしろ幻滅を与えるものかもしれない。出版と同時にこの本を賞賛したブイコフやダニルキンの書評においても、厳しい批判が先取りされているくらいである。

ペレーヴィンは最終的に墮落したのだと、この彼の本は俗悪なものだと、我々の前にあるのは哲学的には後退している社会諷刺、くだくだしい詭弁に過ぎないのだと言いたがっている者たちが、今日見出されることだろう。この著者が議論の余地のないチャンピオンであると認めることは、多くの者たちにはできないだろう。彼が全てを言い尽くし、したがって沈黙したのだと、多くの者たちはひたすら信じていたのだ。⁵¹

『DPP』の筋にはまったく満足できないと言うこともできるだろう。状況の変化が論理ではなく、主人公が数にもとづいて行う操作によって決定されるという事態には、苛立たせられる。スチョーパがスラカンダエフを殺そうとするのは、この男が彼の邪魔をするからではなく、43 という憎むべき数であるからならのだ。

〔中略〕

『DPP』には2つの読み方があるのだろう。通常の読み方は直線的なもので、その場合、『DPP』は退屈で理解しづらいテキストに見えるかもしれない。2つ目の読み方は、小説の至る個所を読み、どこも読まず、遠くから眺めてみたり、それぞれの場面を注意深く、1つずつ眺めたりするというものだ。その時、機知に富んだオリジナルなテキストだ、我々が親しんでいるペレーヴィンのテキストだ、という印象を、『DPP』は生み出すだろう。⁵²

『DPP (NN)』の中心となる小説「数」は、現代のロシアを舞台に銀行家の抗争を描いたものだ。主人公のスチョーパは神秘的な数を重視し、それに従って行動する。また、「ピカチュウ」に似ている彼は、ポケモン好きのイギリス人スラヴ学者ミュスに愛されるようになる。この設定は、ドストエフスキイの『悪霊』を念頭になされた「小悪魔／ポケットモンスター」、「ポケモン／ポケバン（ポケットバンク）」という言葉遊びにもとづくものなのだが、読者はそこに思いつき以上のものを見出すことができず、確かに退屈を感じるようになるかもしれない。

私たちはこのテキストに過去のペレーヴィンの小説に見られた要素、すなわち世界の複数性やサブカルチャーへの関心を見ることができる。しかし、そこには優れた小説が持つはずの魅力、読者を魅了し、驚きを与えるもの、言い換えるならば、良く構築された物語世界やストーリー展開というものが決定的に欠けている。『DPP (NN)』に収められたテキストは、「数」以外の短編にしても、短編集『青い火影』に見られたような叙情性を欠いている。ペレーヴィンの愛読者は『DPP(NN)』に、魅力を欠いたペレーヴィンを、過去の小説の反復を見ることしかできない。

したがって、『DPP(NN)』を衰弱した小説と考えることもできるだろうが、むしろここでは良き文学趣味を持つ読者や、過去の作品の愛読者を裏切ろうとする、悪意ある小説と歌えたい。また、このような作品を通してこそ、私たちの抱く定型的な期待とは別の場所で、ペレーヴィンを読み解くことができるのではないだろうか？

以下の記述では、過去のペレーヴィンのテキストについて改めて考察した上で、その結果を踏まえて『DPP(NN)』を検討することにする。

⁵¹ Быков, Д. Обнаружен Пелевин// Огонек. 2003. №32 (4811).

⁵² Данилкин, Л. Господин гексаграмм// Афиша. 2003. №16 (111). С.29-30.

2. パラレルワールド

ペレーヴィンの作品において最大の特徴となっているのが、世界の多重性、多層性である。彼の小説では、現実の世界と幻想の世界が常に重ねられている。『ジェネレーション P』の主人公ヴァヴィレン・タタルスキイが幻覚キノコを与える友人に語る次の言葉は、ペレーヴィンのテキストのそのような志向をよく示している。

「いいかい、アンドリューハ」彼は言った「悲壮に聞こえないといいのだが、でも本当にありがとう！」

「なぜだい？」ギレーエフは聞いた。

「時々、パラレルな人生を生きることを可能にしてくれたからさ。それなしでは現実の人生はなんと忌まわしいことだろう！」⁵³

とはいえ、世界の複数性という発想は、ロマン主義や象徴主義の文学に見られる神秘性への志向や、SF小説で描かれる「パラレルワールド」といった例を挙げるまでもなく、ごくありふれたものだ。したがって、世界の複数性を指摘するだけでは、ペレーヴィンの作品が現代の優れた幻想小説であるという以上のことを語ったことにはなるまい。

ペレーヴィンの異世界を、評者はそれぞれの立場に引き付けて理解しようとしている。たとえば、ルイクリンは幻覚に対するペレーヴィンの関心を、「逃走」として捉えている。それは世界の表層への「逃走」であることによって、他の現代ロシアの幻想文学、たとえばペッペルシテインらによる「医療解釈学」グループと区別されることになる。

「医療解釈学」に見られる幻覚が、あるいは彼らの表現によれば「オネイロイド」が逃走の内側での逃走であるとするならば、『チャパーエフとプスタタ』の著者の場合、それは外部への、何らかの意味において存在している表層への逃走である。⁵⁴

他方、ゲニスにはペレーヴィンの異世界を、「創造」されたものとする。

本質的にあらゆるペレーヴィンの散文は、この超越的な境界を越えるための教科書、存在はしていないが創造することはできる形而上的な現実を養成するためのレッスンである。⁵⁵

異世界の創造という言葉は、ナボコフを連想させる。いや、むしろゲニスの思考のうちにナボコフの影響を見出すべきなのかもしれないが、たとえば猫に対する愛を語ったペレーヴィンの短編「ニカ」などにはナボコフの痕跡が残されているし、彼のインタビューにもナボコフに対する言及を見ることができる⁵⁶。主人公が物語世界の外側に広がる暗闇へと出て行く『黄色い矢』の結末もまた、『断頭台への招待』などの影響を受けたものかもしれない。

⁵³ Пелевин, В. Generation 'П'. Рассказы. М., Вагриус, 1999. С.265-66.

⁵⁴ Рыклин, М. Время диагноза. М., Логос, 2003. С.84.

⁵⁵ Генис, А. Иван Петрович умер. М., Новое литературное обозрение, 1999. С.89.

⁵⁶ Пелевин, В. Ответы// Афиша. 2003. №17 (112). С.18-19. ペレーヴィンのインタビューのいくつかは、以下の URL のサイトでも読むことができる。http://www.pelevin.nov.ru/

とはいえ、創造された世界の真実性、深刻さという点において、ナボコフとペレーヴィンは異なった姿勢を示しているように思える。ゲニスにはペレーヴィンの世界をかなり深刻に受け取っているが、ペレーヴィンが描く異世界とは、麻薬の産物や、空虚さの上に揺れる幻影といったものに過ぎないのではないか、という疑いを常に読者に抱かせるものだ。

ペレーヴィンの異世界は、プロシナが指摘するように、唯我論と紙一重のものでもある。

これら全てを唯我論、つまり世界を自らの表象と受け止める感覚の発現とみなすことへの誘惑は大きい。著者自身、そのような思考の転換をアイロニカルに先取りしている。「文学の専門家はおそらく、我々の語りの中に、ここ数年流行している批判的唯我論のありふれた産物だけを見出すことだろう」（『チャパーエフとプストタ』⁵⁷）

日常と幻想の対立はロマン主義文学においては、偽りと真実の対立として提示される。言うまでもなく、偽りの世界であるのは日常の世界であり、真実の世界は幻想の最中に見出されるのである。ポストモダンの時代を生きるペレーヴィンの場合、それほど強い真実性への志向を作品中に見出すことはできない。日常と幻想の対立は偽りと真実の対立というよりはむしろ、公式の世界と非公式の世界の対立として展開されているように思える。幻想は日常世界の規範の転覆であり、法を侵犯するものだ。禅や東洋思想、日本文化に対するペレーヴィンの強い関心もまた、そうした規範意識と無縁のものではないだろう。東洋とは西洋の規範を崩す異世界なのである。

3. 死

奇想やユーモアに満ちたペレーヴィンの作品を、愉悦をもたらすものと受け止めている読者も多いかもしれない。しかし、実のところ、彼の作品は虚無的であり、そこには死の影が強く落ちている。

死の主題は、虫たちの死を語った『虫の生活』や、宇宙飛行士を描いた『オモン・ラー』にも見ることができるだろう。また、終末的な感覚にもとづく『黄色い矢』の内容も、死と無縁ではないはずだ。

日常の世界を2次元的なコンピューター・ゲームの世界と重ねた「ゴスプランの王子様」の内容は、3次元の空間を2次元の空間へと、人間の世界を事物の世界へと転位させるものだが、こうした事物の世界への接近にもまた、死を読み取ることができるだろう。『ジェネレーション P』では、テレビなどで社会的に共有される情報が幻影に過ぎないこと、有名人たちはヴァーチャル・リアリティでしかないことが語られるが、そうした図式もまた同様だ。

ペレーヴィンはしばしば、空虚や無といった主題について語る。『チャパーエフとプストタ』はまさに空虚（プストタ）を主題とした小説であるし、『DPP (NN)』のタイトルは「過渡期の弁証法（どこからでもなく、どこにでもない場所へ）」というフレーズの頭文字をとったものだ。彼の描く死の主題もまた世界が空虚であるという発想と無縁ではないが、そうであるならば、生産の終焉とシミュレーションを唱えるボードリヤールの思想に、この

⁵⁷ Пронина, Е. Фрактальная логика Виктора Пелевина// Вопросы литературы. 2003. №4. С.10.

主題を関係づけることもできるだろう。

われわれの文化はことごとく、ただひたすら価値としての生および一般的等価物としての時間の再生産のために、生と死を切り離し死の両義性を悪魔祓いする巨大な努力にすぎない。死を廃棄することは、あらゆる方向に枝分かれするわれわれの幻覚である——宗教の場合では彼岸の生と永遠の幻覚、科学の場合では真理の幻覚、経済の場合では生産性と蓄積の幻覚である。⁵⁸

他方、ルイクリンはペレーヴィンのテキストの「秘儀」性の中に、死を読み取っている。

覚醒した人間は深い意味において死んでいることを、何かを他者に論証する必要など彼にはないことを、ペレーヴィンは理解している。しかし、同時に彼のテキストは瀕死のものであり、きわめて秘儀的な筋立てに関係した論争や反駁、再反駁に満ちている。そこにはカスタネダやその周辺の文学の影響を見ることができる。⁵⁹

ボードリヤールは「彼岸の生」の対立物として死を提示しているが、ここに引用したルイクリンの引用にあっては宗教的な悟りもまた死に他ならない。と同時にルイクリンは、ペレーヴィンのテキストが宗教的プロパガンダではなく、常に論争を含んでいることを指摘している。ペレーヴィンの描く死が「瀕死」のものであることを忘れてはならないだろう。それは「不信」の中に置かれているとさえ、言いうるのかもしれない。

4. 精神分析

「空虚」と内面世界の関わりについて思いを馳せる者は、欠如や無のうちに欲望の対象を見出そうとしたラカンの名前を思い出すかもしれない。いずれにせよ、内面世界という主題を現在考えようとするならば、それは精神分析と無縁のものではありえない。ペレーヴィンと精神分析との関わりもまた、検討されねばならない問題だろう。

ペレーヴィンの異世界とは、日常的な世界の考え方に立つならば、空想や幻覚と呼ぶべきものだ。それは夢にも似た、無意識の（あるいは前意識の）産物である。ペレーヴィンは社会に対して、その諷刺や風俗に対して関心を示しているが、彼の作品の舞台となるのは何よりも人間の内面、すなわち脳の、あるいは想像力の働く場である。たとえば、プロニナはペレーヴィンについて次のように述べている。

ペレーヴィンはわが国の文学において最初に、内的な心理的危機を道徳的葛藤としてではなく、複数の「現実」の「堆積」や混合として表現される心理ダイナミズムの問題として、機能体制の変化による心理生理学的問題として提示したのである。

〔中略〕

新しい人間には前例がない、つまり、存在しているいかなるモデルにも、過去のい

⁵⁸ ボードリヤール『象徴交換と死』今村仁司、塚原史訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1992年、348頁。

⁵⁹ Рыклин, М. Указ. соч. С.83.

かなる先例にも対応していない。その内的な動きを処理すること、制御システムを分析することは、簡単ではない。この条件下にあっては、内的現実の研究こそが、複雑な心理生活の激変を、予期することができず、しばしば危険でもある激変を「馴らす」ための、唯一可能な手段なのである。その法則を理解すること、心理の交錯や迷宮に迷い込まずにいることは、現代人にとって切に重要な課題だ。そのことはペレーヴィン自身も記している。「このテキストを記す目的は『文学作品』を創造することではなく、いわゆる内的生活から最終的に快復するために、意識の機械的循環を記録することなのである」(『チャパーエフとプスタタ』)⁶⁰

20世紀以降の文学においてこのように夢や内面に関心を向ける者は、フロイトやその精神分析を意識しないわけにはいかないだろう。ペレーヴィンの場合も例外ではない。

たとえば、『ジェネレーションP』では、消費社会の心理がフロイトの性欲論(口唇期や肛門期をめぐる議論)のパロディーによって説明される。

いくつかの安定したアイデンティティのタイプを列挙できる。

- a) 口唇ワウ・タイプ(その周囲に感情的心理的生活を組織している優勢なパターンは、金銭への不安な志向)
- b) 肛門ワウ・タイプ(優勢なパターンは金銭の官能的な放出、あるいは金銭の代わりとなる対象の操作で、肛門ワウ・露出症とも呼ばれる)
- c) 抑圧されたワウ・タイプ(上記2タイプの何らかの変種と結合する可能性がある)——口唇や肛門による以外のあらゆる刺激に対して実際的な不感覚が成立した場合。⁶¹

また、短編「カフェのジークムント」では、ある家族の行動を観察するフロイトがやがてオウムに変貌してしまう。

フロイトに対する言及は、『DPP(NN)』にも見ることができる。長編「数」はフロイトとジェルジンスキイに捧げられているのだ。また、この小説の主人公スチョーパは分析医のもとに赴く。

はっきりしたのは、高額な分析家の助言をひそかに受けた後のことだった(スチョーパは精神分析を魂の市場経済のようなものと考えて、敬意を払っていた)。分析家はトレーニング用自転車に乗って診察したが、彼は慈悲の心から恐ろしい真実の1部分だけを人々に話す、年老いた賢い山羊に似ていた。⁶²

このような精神分析への関心は、嘲笑的なものでしかない。精神分析は市場経済へとパロディー化され、分析家は山羊に格下げされる。フロイトはオウムに格下げされ、またジェルジンスキイと並べられることで強権的な性格を批判される。

そのように精神分析に対してアイロニカルな視線を向けてはいるものの、人間の内面を

⁶⁰ Пронина, Е. Указ. соч. С.9.

⁶¹ Пелевин, В. Generation 'П'. Рассказы. С.112.

⁶² Пелевин, В. Диалектика Переходного Периода из Ниоткуда в Никуда. М., Эксмо, 2003. С.99.

扱うペレーヴィンのテキストはやはり精神分析から遠ざかることはできないだろう。そのような介入が可能だとすれば、それはまず、自我の分裂について、そして幼年期への愛着についてなされうるのではないだろうか？

ペレーヴィンの作品においては、統一された「私」というものが提示されない。「私」は複数化し、さまざまな物語を生きることになる。そうした事態について、プロニナは次のように語っている。

心理の不確定性、非局地性、二律背反性が、ペレーヴィンの主人公たちを襲っている。彼らは自らの「自我」を複数のもので、生の様々な瞬間において同一でないものとして感じ初めている。ペレーヴィンの人間は自らの真の「自我」を、登場人物の1人の表現を用いるならば「自らの悪夢の固定された中心」を常に探索し、そして見出すことができない。⁶³

このような自我の分裂について、『チャパーエフとプスタ』では「スキゾフレニア」（精神分裂、統合失調症）という説明がなされている。しかし、世界の諸関係に対する認識が崩壊することなく、「私」が複数化してしまう事態にふさわしい定義は、「スキゾフレニア」というよりは、むしろ「解離」なのではないだろうか？⁶⁴「解離」という現実感の喪失した状態をなぜペレーヴィンが語らねばならないのか、という問題を突き詰めて考えるためには、精神分析的な介入もまた有効であるように思える。

精神分析の応用が可能であると思われるもう1つの主題が、幼年期である（改めて言うまでもなく、幼年期とは精神分析にとって重要な対象である）。世界に対して距離を置いているようなペレーヴィンだが、しかし、彼のテキストには幼年期に対する激しい愛着を読み取ることができる。それは、『オモン・ラー』のように宇宙への関心として、あるいは昆虫や自転車への愛として現われてくる。『ジェネレーション P』の冒頭で語られるペプシ・コーラの缶を、私たちはそのようなノスタルジーの象徴として考えることができるだろう。

5. 空虚という規則

ペレーヴィンの描く幻想世界は現実感を欠いている。それを「死」の世界と、あるいは「解離」の世界と名づけることができるのではないだろうか、というのがここまで語ってきたことだ。おそらく、そうした現実感や、あるいは世界への信頼にもとづく安定感とも言うべきものの欠如が、ペレーヴィンのテキストを他の幻想文学と区分しているものなのだ（あるいは、村上春樹と接近させていると言ってもいいのかもしれない）。

⁶³ Пронина, Е. Указ. соч. С.11.

⁶⁴ 精神医療におけるマニュアル「DSM-IV」では、「解離性障害」は次のように説明されている。"The essential feature of the Dissociative Disorders is a disruption in the usually integrated functions of consciousness, memory, identity, or perception" (DSM-IV. Washington, 2000. P.519). DSM-IV では、いわゆる「多重人格」も「解離性同一性障害」(Dissociative Identity Disorder)として扱われている。「スキゾフレニア」を模倣しようとしているのは、むしろペッペルシテインら「医療解釈学派」の芸術家たちだろう。現代文学に解離を読み取ろうとする試みとしては、たとえば斎藤環による村上春樹論「解離の技法と歴史的な外傷」がある（『解離のポップ・スキル』勁草書房、2004年所収）。

ペレーヴィンの小説では恋愛や性が語られることが稀だ。また、そういう事柄が語られたとしても、そこにエロスを見出すことは困難である。短編「ニカ」の場合にしても、そこで描かれる恋愛は物語構造が必要とする一要素に過ぎない。「数」ではホモセクシュアリズムが描かれるが、それは性愛というよりは暴力の表象と呼ぶべきものだ。エロスを欠いたペレーヴィンの世界では、死もまたその悲劇性を薄めてしまう。そこには不安や喪失感とは無縁の、仮死の世界が広がっている。

とはいえ、生命やエネルギーといった要素をペレーヴィンのテキストに見ることが、まったくできないというわけではない。たとえば、短編「中部ロシアにおける人間狼の問題」では、狼に変容した人間たちが野生の生命力を改めて認識することになる。

サーシャは道を認識した。草地への途上、道は暗く空虚に感じられたが、今、彼はいたるところに生命を見出した。⁶⁵

『DPP(NN)』では権力への関心がグロテスクに提示されるが、それもまた生命やエネルギーへの志向と無縁ではないだろう。あからさまな権力への関心は、死の空間を破壊し、空虚を彼方へ追いやってしまう。たとえば、『DPP(NN)』に収められた中編「フランス思想のマケドニア批評」では、ボードリヤールにエディプス的な憎悪を抱くとされる主人公が、裸体の人々を監禁し、映画『マトリックス』ばりのグロテスクな空間を作り出してしまふ。それは人々を拘束するがゆえに死を志向しているものだが、しかし、その空間を可能にしているのは熱い憎悪の力に他ならない。

仕事場の建物には、キュービクルと呼ばれるオフィスの個人作業スペースを思わせる、37の同一のユニットが据え付けられていた。けれども、この作業スペースには机も、椅子さえもなかった。ユニットにいる人たちは仕切りの中にいる家畜の状態を思わせるポーズで、特殊なベルトに吊るされていた。彼らの手足はコンクリート板に打ち込まれた大釘に皮のバンドで止められており、それゆえ逃走は不可能なのだった。それぞれの顔の前には液晶画面が置かれ、そこにはラカンやフーコー、ボードリヤール、デリダなど思想界の巨人によるテキストの断片が、複雑な一貫性を帯びて照らし出されていた——ミシェル・ウェルベックさえ忘れられてはいなかった。⁶⁶

これらの物語において、ペレーヴィンの幻想の持つ孤独な性質は崩壊してしまう。サーシャは周囲の人々に導かれて「人間狼」に変身するだけでなく、その集団の内部で老いた狼との戦いを演じることになる。「マケドニア批評」では神経症的な状況の中で、グロテスクな笑劇が演じられる。それらにあっては、人間相互の関係性が前面に出されることによって、死や空虚という要素が霞んでしまう。

ペレーヴィンの「空虚」とは実のところ、欲望が生み出す幻想を抑制するための禁欲的規則として機能しているのではないだろうか？ そのように考え始める時、私たちはふたたび、ラカンによる欲望と欠如の関係についての議論を思い出すかもしれないのだが、ここではその問題をこれ以上、追求することはしない。むしろ『DPP(NN)』という作品に見

⁶⁵ Пелевин, В. Generation 'П'. Рассказы. С.357.

⁶⁶ Пелевин, В. Диалектика Переходного Периода из Ниоткуда в Никуда. С.296.

られる、権力や日常への志向に注目してみたい。

『DPP(NN)』の特徴は、それが現代のロシアと向き合っていることだ。といってもそれは、『ジェネレーション P』がエリツィン時代における政商の神話を描いているのに対し、『DPP (NN)』ではプーチン時代の連邦保安局の神話が描かれているというような事態を指しているのではない。

『チャパーエフとプスタ』の幻想は過去のソヴィエト社会だった。『ジェネレーション P』の幻想はヴァーチャル・リアリティの世界だった。それらはアカデミックに流通している認識を利用したものであり、小説の読者に一定の安心感を与えていたと言える。

『DPP(NN)』はそのような安心感とは無縁だ。長編「数」には数の崇拜といった神秘的な要素が存在し、過去のペレーヴィンと同様の幻想世界を読者に期待させるが、やがて別世界の原理として浮上してくるのは「ポケモン」である。主人公たちの関係には、「ピカチュウ」や「ニドキング」といったポケット・モンスターのイメージが重ねられる。

物語の基層をなす日常的な空間もまた、これまでの小説以上にグロテスクな要素に満ちている。銀行家の争いに連邦保安局が介入するという物語は、『ジェネレーション P』の延長にあるものだ。しかし、ポケモン以外にも 007 やスパイダーマン、ホモセクシュアリズムや性具といったキッチュなイメージが散りばめられたこの小説は、『ジェネレーション P』以上に奇怪なものと言える。

『DPP(NN)』は現代社会の逸脱を、直接に反映した書物だ。収録されている短編「アキコ」は「ゴスプランの王子様」同様、コンピューター・ゲームをモチーフとしたものだが、日本の女性をモデルとしたヴァーチャルな映像とエロチックな時間を過ごすために、繰り返し課金されていくというその内容に、「ゴスプランの王子様」のような 2 次元性や叙情性を見ることは難しい。かつてのペレーヴィンの作品が日常的な公式的空間と幻想的な非公式空間という対立にもとづいていたのだとするならば、『DPP(NN)』においてはグロテスクの程度において日常の世界が非公式の世界を超えてしまった、あるいは日常のグロテスクさが幻想の世界に浸透するようになってしまった、と言えるだろう。

『DPP(NN)』に見られるペレーヴィンの新境地とはそのようなものだ。そこでは日常世界への関心が別世界や死の世界への関心を上回ってしまっており、それゆえ、この小説は幻想文学よりも諷刺に接近してしまっているかのように見える。それは小説として衰弱しているかのようにいながらも、同時に奇怪な力強さを誇示している不思議な作品である。

『移行期の弁証法』というタイトルは、この小説が新境地への途上にあることを示しているのだろうか？ ペレーヴィンが今後、どのような小説を発表するのかはわからない。彼は壮大な構築物を提示してくれるのだろうか？それとも、気の利いた時事批評家と化してしまうのだろうか？